

2025年度 ロザリー・レナード・ミッチェル記念奨学金募集要項

立教大学ジェンダーフォーラムは、本学女子学生寮であったミッチェル館の理念を引き継ぎ、ジェンダーについての教育・研究活動の拠点として1998年4月に誕生しました。本奨学金は、本学学部および大学院に在籍する学生で、固定的な性別役割分業観にとらわれない視点にたつて、男女共同参画社会の実現に寄与するためのジェンダーやセクシュアリティに関わる活動・研究をした者(団体)、あるいは活動・研究を計画している者(団体)を幅広く対象とします。

(A) ジェンダーフォーラム論文賞

対 象：学部学生・大学院生(個人・団体)	提出書類：①ジェンダーフォーラム論文賞申込書* ②論文(日本語2万字以内の未発表論文)
支給額：優秀作：10万円、佳作：5万円	
採用件数：1～4件	備 考：執筆にあたってはジェンダーフォーラム『年報』投稿規定に従うこと。
選考方法：論文審査	

※申込書はジェンダーフォーラム事務局、学生課奨学金窓口(池袋/新座)にあります。ジェンダーフォーラム HP 上からもダウンロードできます。

書類提出期間：2025年10月1日(水)～2025年10月31日(金) 23時59分まで

書類提出先：SPIRIT Gmail により、ジェンダーフォーラムメールアドレス(gender@rikkyo.ac.jp)宛に提出書類を添付して提出

採用発表：11月27日(木) 学生課奨学金掲示板(池袋/新座)、10号館通路掲示板、立教時間、ジェンダーフォーラム HP に掲示。

支給方法：12月下旬に開催予定の授与式にて現金支給

【ロザリー・レナード・ミッチェル記念奨学金(A)・(B)の申込書の利用目的】

標記の申込書で取得した個人情報は、奨学金採用者(団体)の選考および発表のために利用する。採用者(団体)の論文・報告書等は「年報」に掲載する。また、奨学金制度広報のため冊子、WEB等に採用者名を記載することがある。

以上に同意した上で、申込書を提出すること。その他、個人情報の取扱いについては、「立教大学プライバシーポリシー：個人情報取扱に関する基本方針」(<https://www.rikkyo.ac.jp/privacypolicy/>)に準じる。

※(B)活動・研究助成金の募集は終了しました。

※申込書、願書はホームページ上からダウンロードできます。(<https://www.rikkyo.ac.jp/research/institute/gender/>)

※詳細や不明な点はジェンダーフォーラム事務局にお問い合わせください。

ジェンダーフォーラム事務局(池袋キャンパス6号館1階)

Tel:03-3985-2307 E-mail:gender@rikkyo.ac.jp HP: <https://www.rikkyo.ac.jp/research/institute/gender>

2025年度ロザリー・レナード・ミッチェル記念奨学金 B 奨学生決定!

今年度の(B)活動・研究助成金には5件の応募があり、5月8日に実施された選考委員会において、2件に助成金を授与することを決定いたしました。選考結果は下記のとおりです。

ロザリー・レナード・ミッチェル記念奨学金(B)活動・研究助成金選考結果

奨学生氏名(所属)	研究課題	支給額
藤 杏子(社会学研究科社会学専攻博士課程後期課程1年)	「スポーツ実践におけるジェンダー再生産と揺らぎの過程——女性プロボクシング選手を事例として」	8万円
内山 紗緒里(法学研究科法学政治学専攻博士課程後期課程1年)	「性売買と性的自己決定権に関する憲法学的研究——持続化給付金等支払請求事件(東京高判令和5年10月5日訴月70巻2号200頁)を手がかりに——」	5万円

立教大学ジェンダーフォーラムのご案内

「常識」とはならず、性差やセクシュアリティ(性自認・性的指向など)についての問題を本音で語り合い、考える場、それがジェンダーフォーラムです。ジェンダー(gender)とは、社会や文化の「常識」にしたがってつくられた性差のこと。「女/男らしさ」「女/男役割」や異性愛を「あたりまえ」とする考え方もそのひとつです。「常識」「あたりまえ」とみなされている性をめぐる社会通念・制度・規範には、一人ひとりの個性的なあり方を抑圧するものが少なくありません。ジェンダーフォーラムは、女子学生寮ミッチェル館(1998年閉館)の精神を受け継ぎ、ジェンダーについての教育・研究拠点として1998年に誕生しました。ジェンダーに関する身近な違和感をもっている方から学識を深めたい方まで、様々な人に広く開かれています。より多くの人々が、自分自身の問題として社会生活における「ジェンダー」に気づき、理解し、考える契機となるよう、公開講演会やジェンダーセッション、コーヒアワーなどを開催しています。

開 室 日：毎週月曜日～金曜日

開 室 時 間：10:00～16:00

場 所：立教大学池袋キャンパス6号館1階

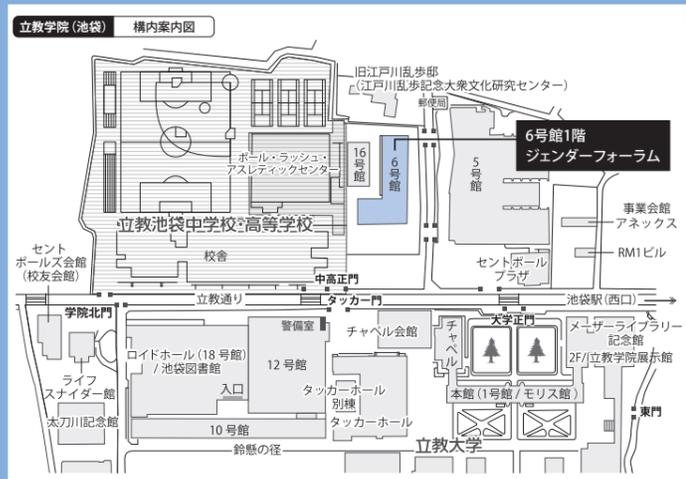
TEL：03-3985-2307

E-mail：gender@rikkyo.ac.jp

URL： <https://www.rikkyo.ac.jp/research/institute/gender/>



6号館1階の入口付近です!



GEM

Vol.53 2025.10.01
Rikkyo Gender Forum News Letter



Gender Forum
Rikkyo University



Gemとは…命名時には本フォーラムがその精神を受け継いでいる立教大学女子寮ミッチェル館(1998年閉館)の“M”にちなんだものでした(Gender Encountering in Mitchell)。現在はさらなる発展を企図して、ジェンダー平等の実現を目指すことを意味する Gender Equality in the Making とし、ニュースレター、メーリングリストの名前として使用しています。

2025年度公開講演会(2025年6月19日(木))

「これからのジェンダー平等」

登壇者：江原由美子氏(東京都立大学名誉教授)

近年、世界規模で「極右ポピュリズム」勢力が台頭し、ダイバーシティ施策への逆風が吹き荒れている。そのなかで、どうすれば「ジェンダー平等」の実現に向け、異なる価値観や考え方をもつ人々と連帯することができるか。こうした問題関心のもと、本講演に参加した。

本講演では、江原氏による講義のあと、参加者との質疑応答が行われた。まず、江原氏は格差の拡大によりマジョリティの生活状況が悪化するなか、ダイバーシティ施策がマイノリティへの「特別扱い」と捉えられることによって「不公平」感が生じていると分析する。ダイバーシティ施策は「平等」を実現するという「正義」の名の下に行われることが多い。そのため、マイノリティの処遇等を「社会的カテゴリー」に基づいて決定しているという「差別意識」が弱まると、それとの対比によりポジティブ・アクションへの反発が強まるという。

しかし、表面的には差別が弱まっているように見えても、「アンコンシャス・バイアス」や「マイクロアグレッション」という「無意識の差別」は続いている。江原氏は、無意識であるがゆえにマジョリティの「特権」を意識化することは困難であり、「無意識の差別」という問題提起はマジョリティとマイノリティとの間の分断を強めると指摘する。そのため、「無意識の差別」を個人の「差別意識」に帰するのではなく、これを生み出している「差別的な社会構造」との関連で読み解き、その変革を求めることが重要ではないかと訴えかける。

それでは、ダイバーシティ施策への支持・反対をめぐり男女間格差が拡大するなか、「これからのジェンダー平等」を考えるうえで重要なことは何か。江原氏は、齋藤早苗「男性育休の困難」(2020年、青弓社)を「ヒント」に、「性別」以外の境界線をあえて見出し、男女間の対立を避けながら問題提起を行うことを提案する。たとえば、「性別役割分業」を維持する重要な要因として「仕事優先の時間意識」を見出し、これを男性の「偏見」ではなく社会構造の問題と捉えることで、男女が連帯してその変革に取り組めるようになるという。

最後に、江原氏は「ジェンダー平等」実現の可能性について、「ジェンダー平等社会」が何を意味するのかを男女がどれだけ理解しうるかに依存していると述べ、本講演を締め括った。

本講演の直後に参院選が行われ、日本でも「極右ポピュリズム」勢力が大きく躍進した。江原氏の提案は、「ジェンダー平等」にとどまらず、あらゆる「平等」の実現において極めて重要であるといえよう。生きづらさを「誰か」のせいにしても、「誰か」を苦しめるだけで根本的な問題の解決には結びつかない。私たちはいま、生きづらさを生み出す社会構造の変革に向け、男性と女性、日本人と外国人、現役世代と高齢世代といった「社会的カテゴリー」に基づく分断や対立を乗り越える新たな境界線を見出せるかが試されているのではないかと。

内山紗緒里(本学大学院法学研究科博士課程後期課程1年)

ACTION REPORT

第95回ジェンダーセッション(2025年7月17日(木))

「身体が繋ぐスポーツ・アート・カンフー」

登壇者：小林勇輝氏(現代美術家・パフォーマンスアーティスト)

一見、「スポーツ」と「アート」は異なる制度的文脈や価値によって展開され、個々に確立された営みであるように思える。しかし、本講演を通して両者は「身体」を媒介とした表現・実践という点において、交差し、共有される営みであると講師の小林勇輝氏の実践や表現、問題意識から捉えなおすことができた。特に、小林氏は自身の表現活動において、自身の身体の「加害性」や、歴史の男性主権的な側面に向き合いながら、スポーツやカンフーをアートにつなげた実践を行っている点が印象深い。

小林氏は、10代から始めたテニスの選手活動のために渡米し、黒人の公民権運動の歴史やフェミニズムについての学びから、ロンドンで出会った身体を中心に用いる芸術手法、パフォーマンスアートによる表現を実践する現在に至った。身体や時間、空間、オブジェクト、コンセプトなどを軸に、人間によって異なる表現ができるパフォーマンスアートはジェンダーやセクシュアリティのスペクトラムや固有性と親和性が高い。小林氏の表現活動では、自己の身体が何であるか、何になりえるのかという問いが具現化されており、「New Gender Bending Strawberry」(2012)では自身がイチゴ頭のキャラクターという社会的カテゴリーから逸脱した存在に変身し、欧米社会において自身がどう見られているかを問いかけた。

小林氏の作品には、フェミニズムやスポーツを通じて、自身の身体に対する違和感や身体の加害性を表現したものが多く見られる。小林氏の作品で用いられる異性装や暴力、あるいは性器を含めた身体の露出といった手法は、身体を疲弊させ、その脆弱性を露わにするためのものだ。この小林氏の「自分の身体を脆くしていく」という表現実践は、内面化されやすいスポーツの権威性

や身体の加害性、社会的な特権性を、手放していく営みではないかと私は考える。

また、小林氏の表現を考えるには、カンフーの活動は不可欠な要素となるだろう。小林氏の行うカンフーは、女性によって創始され、家庭内暴力や性暴力に対する護身術が基になっている「詠春拳」である。2019年より鍛錬を開始し、2022年、2024年には香港や中国本土で鍛錬を行い師範としての認定を受けた。「The Wing Chun Project」(2019)は、これらの詠春拳の活動を学際的パフォーマンスとして捉えることで、創始者の思想を再解釈し、現代の暴力やジェンダー、侵略戦争の歴史をどう請け負うかを問い直すことを目的としたプログラムである。

小林氏の行う実践は、加害性を可視化し特権性を手放すことを意味している。自身の加害性と向き合うことは、社会に構築され、隠された自身の被害の克服ではないかと考える。小林氏は、自身の表現活動では問いを投げかけること以上に、作品の“わかりづらさ”そのものが、見る人にとって「どう向き合うか」を選び取るきっかけとなること、つまりひとつの選択肢として立ち現れることを目指していると語る。クリア・ヌード表現に未だ多くの制約がある現代日本で、小林氏の作品は、表現者と見る人が互いの「当たり前」を揺るがし合う対話が生まれる場となるのではないだろうか。

藪田有以子(本学社会学部社会学科3年)

ジェンダーフォーラム運営委員 就任のご挨拶

2024年4月に立教大学社会学部に着任し、このたびジェンダーフォーラムの運営委員を務めることになりました、杉浦郁子(すぎうらいくこ)と申します。自己紹介として、授業や研究の内容について少しお話しさせていただきます。

私の授業では、「ジェンダーを研究することは差別について学ぶこと」という言葉を大切にしています。これは、いつかどこかで読んだある研究者の言葉なのですが(誰の言葉だったのか書き留めておくべきでした)、私の教育の軸となっています。ジェンダーやセクシュアリティについて社会的に学ぶことは、社会に存在する格差や差別の実態、それを生み出す構造や歴史を理解することと不可分です。授業では、性に関する固定観念や、それを前提とし

た制度がどのように格差や差別を生み出しているのか、そしてそれを変えていくためにどんな方法があるのかを、学生の皆さんと一緒に考えることを目指しています。

研究では、「日本における性的マイノリティの社会運動」に関する歴史的な調査に取り組んでいます。最近では、1970年代から1990年代半ばまでの首都圏でのレズビアン解放運動に注目し、ミニコミ誌などの資料や当時活動していた方々へのインタビューを通じて、その歩みを明らかにしようとしています。差別に抗い、社会を変えようとする人々の集まりや行動を、社会的な視点から丁寧に見ていきたいと考えています。

日本で最初のレズビアン・サークルとされる「若草の会」(1971

立教大学コミュニティサークル Rikkyo Pride のご紹介

私たち Rikkyo Pride は、LGBTQ 当事者やアライの方、ジェンダーに関心がある方が安全に交流でき、話すことのできる空間作りを目的としたサークルです。発足以来、人数の増減を伴いながら活動してきましたが、2022年に立教大学非公認団体として再始動し、今年で4年目になりました。ここでは私たちの活動を紹介させていただきます。

1. 当団体の理念とグラウンドルール

私たちは異性愛規範や性別二元論などによる排除のない、安全安心なコミュニティを作るために、3つのルールを設けています。

- ①「カミングアウトの自由を守ること」
カミングアウトをするもしないも個人の自由であり、言いたくないことは言わなくて良い。各自の選択を尊重するコミュニティでありたいです。多様な背景、知識、立場性を持つメンバーが集まっているからこそ、互いを尊重したコミュニケーションを大切にしています。
- ②「アウトティングの防止」
自分のセクシュアリティを語れるのは自分だけ。メンバーのセクシュアリティを他者に勝手に伝えないうお願いをしています。
- ③「性別を問わない呼称の利用」
ミスジェンダリングを防ぐため、相手のセクシュアリティを知らない時は、見た目で判断せず、性別を問わない呼称「〇〇さん」などの利用を推進しています。

1. 活動内容

当団体では以下の3つの活動を行っており、メンバーはいつでも自由に参加することができます。

☆お昼会
月2〜3回昼休みに各自持ち寄った昼ごはんを一緒に食べるお昼

会を実施しています。プライベートを確保し安心して話せる環境を守っています。話題は同性婚や制服の課題など社会的な 이슈 から、面白かった授業など様々です。

☆放課後会
内容はお昼会と同様ですが放課後は比較的長い時間が確保できるため、映画鑑賞会やテスト前の勉強会などを開催しています。

☆お出かけ会
月1回程度、学外にお出かけする会を行っています。春学期は新宿御苑、プライドハウス、東京プライドを訪れました。東京プライドは特に人気が高いイベントでパレードにも参加しました。夏休み期間には合宿を実施しました。

2. 活動を通して

Rikkyo Pride の活動が続けてきて強く感じるのは、ここが「自分を隠さなくていい居場所」になっているということです。日常の中で、誰にも言えない気持ちや、自分の性別に関する不安を抱えている人は少なくありません。大学内にも、そうしたことを安心して話せる空間は限られています。私たちのサークルでは、カミングアウトの自由やアウトティング防止といったルールが、単なる建前ではなく日々の会話に生きています。呼び方ひとつにしても相手を尊重する姿勢があり、「ここなら大丈夫」と思える空気があります。もし今、居場所がないと感じているなら、Rikkyo Pride はいつでもみなさんを歓迎します。大きな声で主張しなくても、黙っていても、そこにいるだけでいい。あなたの存在を誰も否定しない、そんな安心感のある「居場所」をこれからつくり、守り続け、一歩踏み出そうとする人を応援していければと思います。

Rikkyo Pride 運営メンバー 一同

ミニコミ誌の一部を公開しています。当時の声や活動の記録を、できるだけ多くの人に知ってもらいたいです。また、社会運動の変容を理論的に捉えるための枠組みについても考察を進めています。社会運動のダイナミズムを分析し、過去の営みから現在の課題を照らし出すことができればと思っています。

ジェンダーフォーラムの活動を通じて、学内外の皆さんと対話を重ねていけることを心から楽しみにしています。どうぞよろしくお願いたします。

杉浦郁子(本学社会学部教授)

年頃発足)では、主宰者の鈴木道子さんが、孤立しがちなレズビアンたちをつなげる場づくりに尽力されました。その後、1970年代半ばから80年代にかけて、「女の運動」——ウーマン・リブやフェミニズム——と関わりながら、レズビアンたちは緩やかなつながりを築き、思想的な基盤を共有しつつ活動を広げていきました。私がとくに関心を寄せているのは、当初は「女の運動とともにあった活動」が「レズビアンのみに向けた活動」へと変化していく過程です。

こうした運動の記録を残すために、資料の収集や整理にも力を入れています。「レズビアン・デジタル・アーカイブス」(https://l-archives.jp)というウェブサイト運営しており、インタビューや